

## 製材（清水）

清水港は、江戸時代に幕府や諸大名のご用材の集散地として発展し、明治 32 年（1899）に開港場となってからは、茶やみかんの輸出、木材の移入や輸入、満州からの大豆輸入港として発展していきます。

清水港の木材産業界の取扱原木は、建築用材、製函用材、木工用材に加えて製紙原材料、下駄用材などの素材でした。

特に、静岡・清水における下駄工業は、明治中期から盛んになり、大量生産するため北海道から柳の下駄棒（下駄の半製品）を移入しました。

大正時代になると、製材用として北洋材の入荷が増加してきます。

大正 12（1923）年 9 月 1 日午前 11 時 58 分突如として関東地方を襲った大地震は、一瞬にして京浜地方を灰燼に帰し、一般市民の生活はもとより産業界も全般にわたって壊滅状態という我が国災害史上最大の被害をうけました。

偶然の巡り合わせといえますが、大正 8 年（1919）、樺太における虫害木が多量に清水港に入港し、その原木を目当てに島田、天竜地区からの工場の移転が増加して、清水港における製材能力が増大していた矢先の震災であり、しかも、国鉄、国道が大損害を蒙り陸上輸送が一切途絶したため、震災地に最短距離にある木材主産地としての清水港の有利性が存分に発揮され、清水の製材業は活況を示しました。清水市史に「清水港木材界の本格的な基礎はこの時築きあげられたとって過言でない」とあります。

大正時代以降、清水の製材業は北洋材による製函材製造を行なっていましたが、合板・段ボールの普及や建築需要の増大などの社会情勢の変化に伴い、昭和 36 年（1961）頃から輸入材の中心が米材に移り、製品面でも建築材へと戦略転換が行われました。

なお、昭和 25 年（1950）1 月 23 日、「庵原安倍郡材木商同業組合」（昭和 5 年（1930）設立）を母体に、「清水港木材協同組合」が設立されています。この組合の構成員は、製材業者と木材業者の混成であったため、製材業者は、昭和 27 年（1952）5 月 30 日、「清水港製材製函協同組合」を設立し、10 年後、現在の「清水港木材産業界協同組合」に名称変更しました。